

「与力仲間往復書翰」という史料（四番町歴史民俗資料館蔵）に、次のような原胤昭翁の書き込みがある。

一歴代仁杉家ノ後継、崇祖ノ念ニ厚クアルヲ敬服シ、後裔ノ弥ヤ栄ヘン事ヲ天ニ祈ル
胤昭謹シシテ誌ス

このように祖先を敬う歴代の仁杉家当主の中でも、九代目・五郎左衛門は抜きん出て祖先崇拜の念が篤かったと思われる。特に、次の「朱印状探索」、「墓所改葬」、「遥拝塔建立」などの行動から、仁杉家の祖・伊賀守幸通に対する崇拜が篤かったと見える。

1) 朱印状探索

第二編で述べたように、仁杉家の始祖・伊賀守幸通は小田原北条家で材木奉行を勤めており、天正年間に主の北条氏康から朱印状を受領している。

江戸期になって編纂された「小田原衆所領役帳」に

一仁杉伊賀が子孫は豆州熱海湯場の商人となり伊勢屋と称す。今に相続せり北条家よりの文書、仁杉伊賀守殿へとしたるに虎印を押せしものを家に蔵せりといふ。世系いまだ研究せず、九代の孫今子孫岩瀬加賀守組仁杉五郎左衛門幸生、文書数通所蔵とす。

とある。

祖先を崇拜する五郎左衛門は、仁杉家の祖・伊賀守幸通が北条氏康から授与された朱印状のことを知り、なんとかこの朱印状原本を入手したいと思っていた。

たまたま熱海の温泉場で旅館を営んでいる人が幸通の後裔、つまり同族にあたる事を知り、さらにこの同族が朱印状を持っていることを聞き、懇意にしていた播磨屋半蔵という商人に、熱海へ行って朱印状を探してくれるよう依頼した。文政2年（1819）の事である。

半蔵は熱海に赴き、苦勞してようやく幸通の後裔とされる同族を探しあてた。その同族は芥川九右衛門といい、熱海温泉場で伊勢屋という温泉旅館を営んでいた。

早速朱印状の事を問うと、その主が言うには

「その文書はかつて我が家にあったが、祖先がひどく貧窮した時期があった。ちょうどその時、江州日野の何某という者が当地に滞在していて、その人から若干の金を借り、その質として朱印状を渡した。それから何十年か経っているが、私はまだその借金を返済できず、朱印状を返してもらえていない。もし、あなたがその朱印状を入手したいのなら近州日野に行ってみたらどうか。」

という事であった。

半蔵は早速江戸に戻り、五郎左衛門にその旨報告したところ、どうしても朱印状原本を手に入れない五郎左衛門は、江州日野に行くよう半蔵に再度依頼した。

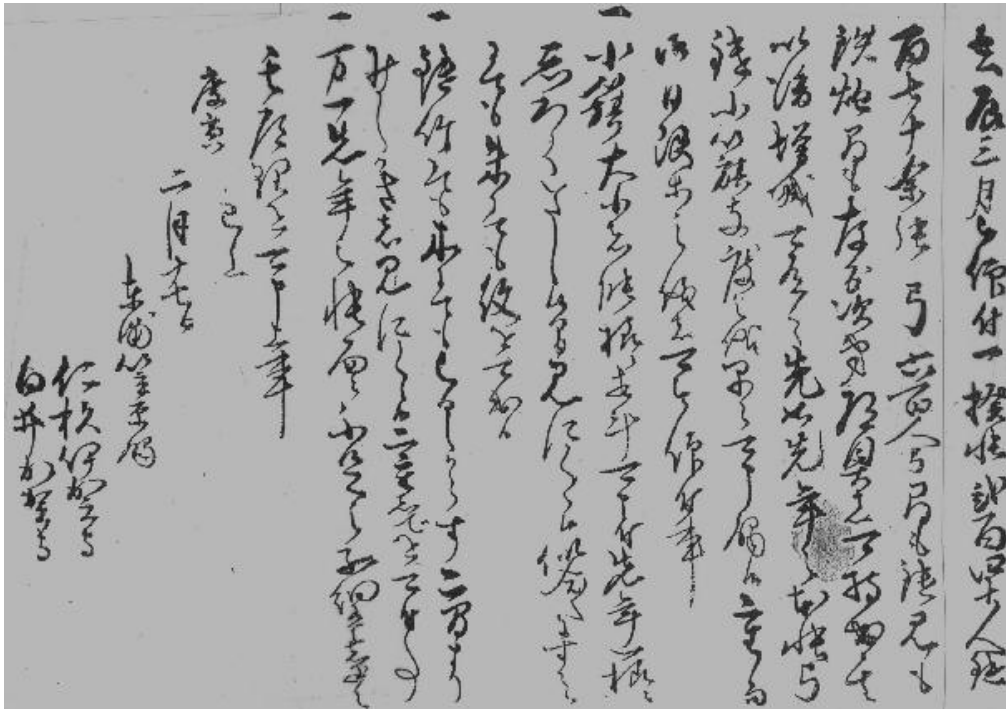
半蔵は江州日野に向かい、その家を訪ねた。そしてようやく朱印状を手に入れ、東

海道を江戸に向かった。

途中、島田宿に泊まった時、たまたま知り合いの正端という人にその事を話したところ、正端は宿内の桑原藤泰が駿河地誌を編纂している事を知っていたので、参考になればと、その朱印状の写をとって桑原に届けた。

このようなことがあって、五郎左衛門の朱印状探索の経緯が、後に発刊された駿河記付録に掲載されている。この朱印状の内容は、天正18年(1590)、秀吉・家康連合軍による小田原攻めに備えて軍備強化を急ぐ北条家から、かねて本帳に決められている通りの兵員を集め武器を準備するよう、仁杉伊賀守と白井加賀守にあてて指示した触書である。

この原本の現在の所在は明らかでないが、その文面は「戦国遺文」など多くの文献に紹介されており、また、五郎左衛門が幕府に提出した仁杉家由緒書にも写(写真)が添付されている。



仁杉家が幕府に提出した家系図に添付されていた朱印状の写
(東大史料編纂所 本朝武家諸姓分脈系図)

前項で述べた熱海の伊勢屋は、江戸初期から続く老舗温泉旅館である。この温泉旅館を代々経営してきた芥川氏は、熱海温泉場の草分けの1人で、芥川五郎右衛門、九郎右衛門などの名を江戸期の熱海の史料に見ることが出来る。

この芥川氏の祖は芥川但馬守であり、「本朝武家諸姓分脈系圖」(東京大学史料編纂所蔵)に

一芥川但馬守透安浄慶 元和8年8月3日 没 118歳 善叟浄慶居士
妻仁杉六郎幸通女 自駿州雲門明邑 寛永13年6月20日 号 日法
右両人碑、豆州熱海邑師芥川延安持地山半腹有此处墓

とある。仁杉六郎とは伊賀守幸通の事である。

すなわち、幸通の娘が芥川但馬守に嫁ぎ、この芥川氏が熱海の商人（温泉場経営）になったのであり、小田原役帳にある「仁杉伊賀が子孫は豆州熱海湯場の商人となり伊勢屋と称す」は「熱海の商人の妻となり伊勢屋と称す」となる。

この伊勢屋については第3編第6章に詳しく述べる。

2) 始祖の墓所建立

文政6年（1822）、五郎左衛門は仁杉家始祖の伊賀守幸通の遺徳を偲び、江戸の菩提寺にあった墓を仁杉氏ゆかりの地・駿河国仁杉村の大乗寺近くに改葬整備し、さらに墓前に顕彰碑を建立した。

幸通は「本朝武家諸姓分脉系圖」「仁杉氏系図」などの史料によると天正20年（1592）9月20日に仁杉村で没した。

最初、北条早雲も眠る相州湯本金湯山早雲寺に葬られた（法名篤心栄輝大禅門）が、後に子孫が徳川家臣となって江戸に移住したため、武州豊島郡桜田村光国山喜運寺に改葬された。

没後230年を経た文政6年（1822）、五郎左衛門は仁杉家始祖の墓を仁杉家発祥の地・駿河国仁杉村の大乗寺（浄土宗広智山佛心院 写真下）に改葬すべく大乗寺と交渉した。

しかし大乗寺境内には伊賀守の威徳にふさわしい広さの場所がなかったのと、幸通の戒名に「大乗寺殿」の4文字があるため、大乗寺側および檀家が難色を示し、境内に墓所を作ることが出来なかった。



結局、名主善兵衛の計らいで、大乗寺とは甲州往還道を隔てた丘の上にあった名主の土地を買って改葬することになった。小田原から石職人などを連れて行き、およそ百両（約1千万円）という大金を投じて、五輪塔の周囲を玉垣で囲い、その墓前に幸通の顕彰碑を配した立派な墓所を建立した。

号は大乗寺殿直道寂園大居士

今も御殿場市仁杉の丘の上にその威容を残しており、近所の人達の話によると、今でも遠く宮城県や茨城県、神奈川県などに住む子孫たちが頻りに墓参りに来ており、いつも新しい供花が絶えないという。

この墓所は今も御殿場市仁杉字上の山、大乗寺に程近い丘の五輪窪と呼ばれる地に残っており、「五輪さん」と呼ばれて地元の人たちにも親しまれている。

仁杉圓一郎氏によれば、五輪の宝篋印塔（写真上）が天正時代当時からもの、周囲の石垣などが文政年間に五郎左衛門が整備したものというが、本当に江戸から運んだのかは定かでない。



墓前には文政6年（1822）、五郎左衛門により建立された石碑があり、この墓の由来を説明している。

約170年という長い年月を経て、表面はかなり風化しており、簡単には記述されている内容を読む事ができないが、幸いにも数十年前に拓本がとられていた。下右の写真はこの碑文の拓本である。（世田谷仁杉家提供）



上は墓前の幸通顕彰碑

右はその拓本。

後から2行目に「大乘寺」の3文字が削られていることがわかる。

この墓前碑には後日譚がある。五郎左衛門が墓所建立から約30年後の嘉永5年（1852）、碑文に「大乘寺殿」と書かれている事が再び問題になり、元名主の善兵衛、

当時の名主吉衛門、組頭仁兵衛の3人が相談し、江戸表の仁杉家当主、2代目八右衛門に掛け合い、碑文から大乘寺の「大乘寺」の3字を削り取ったいきさつがある。

建立されてから約170年の風雪を経て、表面はかなり風化しているが、3字を削った痕跡は明らかである。

昭和になって仁杉幸司氏（圓一郎氏の父）がこの碑面の拓本を取っているのがこの写が上右の写真である。史料4300に碑文とその読み下し文を掲載する。

これを起草したのは幸通の9代目の子孫・五郎左衛門であり、およその内容は次のとおりである。

我が祖・藤原の朝臣・仁杉伊賀守の祖先は藤原南家の祖・左大臣武智麻呂、その九世・遠江守為憲、その曾孫・駿河守維景、その嫡男の伊豆横領使維職、その五世・伊東九郎祐清、その嫡男・左衛門権佐祐光の十二世の孫である。

代々、伊豆国伊東に住んでいたが、君（幸通）が駿州の仁杉邑に移住したので、姓を仁杉と改めた。仁杉は甲州に接する要地であり、北条氏康は君に甲駿の管轄を託した。武田、今川などは君の威名を聞き、敢えて境界を越えて侵入しなかった。

しかし、伊豆国の領土は乱れに乱れ、父子が戦ったり、或いは兄弟が戦ったりしていた。皆は「国に旧主なし、どの規律に従えばよいのか」と嘆いた。

このため君は本国（伊豆）に帰り、民に廉恥（心が清らかで恥を知る心）を教え、武備に励んだ。周辺の者はこれを聞き、大変畏れ、君を伊豆四将の一位と称した。

天正庚寅五月、豊臣氏が小田原に侵攻した時、一族の北条氏矩は葦山城を守備した。君は逞兵を率いて来援した。このため葦山城は最後まで落城しなかったが、小田原城主氏直は敗走し、各地の城はことごとく陥落した。

君は嘆いて言った。「大きな家が倒れようとするときは、一木で支えきれぬものでない。国が滅びようとする時は一人の力ではどうにもならぬ」と。そして遂に故郷の仁杉へ隠棲し、静かに志を養った。しかし惜しくも年齢には勝てず、天正二十年壬辰九月廿日、病を得て没した。直ちに仁杉の地に葬り、大乘寺殿と法諡（おくりな）した。八代目の子孫・仁杉五郎左衛門幸信、文政六年癸未四月、墓前にこの碑を立てる。

幸通を「君」と称するのは崇拜する祖先だから仕方ないとしても、先祖を美化するあまり、幸通の事跡を誇張して書いているきらいがある。

「北条氏康が君に甲駿の管轄を託した」、「武田・今川などは君の威名を聞いて敢えて境界を越えて侵入しなかった」、「君を伊豆四将の一位と称した」など、史実には見当たらない。

3) 幸通遥拝塔建立

「伊賀守幸通遥拝塔」が江戸の菩提寺に建てられており、今も文京区白山2丁目の喜運寺に残っている。

駿河仁杉村は江戸から片道でも4、5日はかかる行程で、簡単には参拝できない。

このため、江戸の菩提寺である小石川喜運寺に遥拝のための塔を建て、命日にはここに来て西に向かって富士の麓にある墓所を遥拝し、墓参に代えていたものと考えられる。

この遥拝塔婆をどの時代に誰が建立したか記録がないが、駿河仁杉村に幸通の墓所を建立した五郎左衛門が立てたものと考えられる。



正面には 仁杉伊賀守藤原幸通
とあり、右側面に

天正 20 年 9 月 20 日

大乘院殿直道寂園大居士

天正 19 年 2 月 21 日

慈照院殿圓妙寂大姉

と、幸通夫妻の没年月日と法名が刻まれている。

また、左側面には

幸通之墓並碑在于駿州駿東郡仁杉邑為遥拝建此
塔婆於當寺以祭之

とある。

喜運寺は小石川植物園（幕府の薬草園、後に小石川養生所）の近くにある。また、白山には白山御殿と呼ばれる将軍綱吉の館林時代の屋敷があったところで、ここから喜運寺の方への下り坂は御殿坂または富士見坂と呼ばれていた。

喜運寺もやや小高いところにあり、おそらく晴れた日には伊賀守幸通のある富士山が良く見えたことであろう。

4) 歴史の皮肉

仁杉家の祖・伊賀守幸通が北条家から朱印状を授与されていることを知ると、そのありかを探索し、父祖の地・仁杉にある幸通の墓が荒れていると知ると、遠く駿州仁杉村まで行き、大金をかけて墓所を改修し、さらに、その墓所を江戸から遥拝するために遥拝塔を建立するなど、祖先の事を敬い、誰よりも仁杉家を愛していた五郎左衛門が、後述のようにお救い米買付の不正事件に連座して死罪となり、与力仁杉家を断絶させてしまうことになるとはなんとも皮肉な運命である。

何代も前の先祖の墓を、それも遠隔の地に建立するのは、よほど五郎左衛門が祖先を尊び敬う心が強かったからだと考えられるが、経済的にも余裕がなければ実現しない。

この墓所建立にも大金が費やされている。この時代、米を経済基盤とする武士階級の生活は江戸中期以降の物価高騰により、非常に苦しくなり、下級武士は数年先までの

俸給米を担保に町方から借金する上に、内職をしたり、役宅の一部を貸家にしたりして生活費不足を補っていた。

町奉行所の与力は禄高こそ 200 石だったが、役得や付け届けが多く、一般武士に比べればはるかに豊かな生活をしていた。この朱印状探索や墓所建立は、五郎左衛門に経済的な余裕があったあらわれであろう。